に子供と雖も中々馬鹿にはならぬ者であり升、又自家を保護し或は父母の勞を助けるといふ事は此の幼き時分から發達して是非善惡は承知してをるのであり升から、父母兄姉等の導き樣如何に依りて善とも惡ともなる者であり升から充分此等の點には其の指導の任に當てをる者は吳々も注意せねばならぬ事であり升。

梅ちやんの日誌

三河　鈴木かなへ

妾の妹に今年四歳になる梅ちやんと云ふのがあります、妾が常に大事に遊ばせてやるもんですから御母さんの方は餘り慕ひませんで、却つて妾が少しても居ないと直ぐ泣き噪はきますけれど、妾も只今は村の高等小學校へ往かねばなりませんから、同じ樣に遊んで許り居る譯にはいきません毎朝學校の始まるまでは種々珍らしい業をして見せて喜ばせますそして最早學校が始まらんとする時に、梅子ちやん、姉さんは、今から學校へ行つて面白いお話を習つて來て話して上げるから大人しくして遊そんで居るんですよと謂ひますと梅ちやんはもー大層に悄れ顏をして御母さんの許へ往きますから、妾は直ぐ學校へ行きます、或日のこと妾の村に近藤先生と甲す御方がありますが此の御方は小學校の先生で妾の御父さんとは別して親しい間ですから度々御出でになつてお話など致されます、此の日は折り惡く御父さんが要用で他へ行かれた留守でしたから先生は雜誌や新聞を讀で御出でになつたが、退屈をなされましたと見え、妾と梅ちやんと遊んで居る椽側へ御出てになり

「梅ちやん味好い饅頭を上げるから、叔父様の方へ入らつしやい」と、謂はれますと、梅ちやんは、可愛い小さな兩手を廣ろけ顏中一杯笑みを散らして直ぐ、抱かれました、すると先生は「梅ちやん叔父様がね今梅ちやんの御腹を撫で押すとすぐ菓子や羊羹が出て來ますよ」と謂はれて、右手に菓子を持ち左手にて梅子の腹を押し「そーら御覽ん」と何度も〳〵右手の菓子を見せますとさあ梅ちやんは膝の上で大喜びで終に先生が大好になつて一寸も離れませんかち御母さんや妾が手に々々菓子や玩弄物を持つて見せてさま〳〵にすかして見ても一切聞き入れません、詮方なく其の夜は とう〳〵先生を御賴みして梅ちやんを寐させて頂く事にしました。

毬歌と子守歌

佐藤生

備後の毬歌

一出て廻れ、私石割な。石割ならこそ。石割ます る

二出て廻れ、庭掃な。丁稚ならこそ、庭掃ます る

三出て廻れ、私しやみひかな。藝者ならこそ、しやみひきます る

四出て廻れ、私しわよらな、年寄ならこそ、しわよります る

五出て廻れ、私碁はうたな。どうちならこそどをうちます る

六出て廻れ、私櫓はおせな、せんどならこそろをおします る

七出て廻れ、私質おかな。貧乏ならこそ質おきます る